

*Honorary Lecture*

**Ryosuke Inagaki**

**(Kyushu University, Professor Emeritus)**

「人格と交わり」

稲垣良典

只今ご紹介いただきました、稲垣でございます。本当は原稿を読まないで皆さんの顔を見ながらお話しするのが本筋ですが、最近の話の途中で脱線することもありますので、本日は原稿を読むような形で皆さまにお話しをすることにしました。

I. はじめに

今日、3月25日は教会のカレンダーでは神のお告げの祭日になっております。2000年前にパレスチナのガリラヤ地方の小さな町の一人の乙女マリアに、突然神から遣わされた天使ガブリエルが現れまして、マリアに向かって、最初にアベ・マリアと呼びかけました。アベとはこんにちは、という挨拶ですが、ここでは特に喜びなさい、おめでとうという意味が含まれているのだそうです。「あなたは身ごもって男の子を産む。生れるのは、聖なるもの、神の子と呼ばれる」と告知したと言われたとルカ福音書には記されております。今、私がなぜこのような話を持ち出したかと申しますと、私は最近になってやっと古い時代、日本でいいますと弥生時代の前、縄文時代、紀元4世紀、5世紀聖アウグスティヌス時代の聖書注釈の書物を身を入れて読むよ

うになり、今さらのように、マリアへのお告げの背後にある神様の濃やかな、慈しみ深い配慮、まさしくケアを読み取るべきことを学んだような気がしたからであります。ルカ福音書によると、当初、乙女マリアは驚き、当惑して、どうしてそのようなことがあり得ましようか？、という反応を示したのであります。ガブリエルによる適切な説明、助言に助けられて最後には「私は主の、はしためです。どうかそのお言葉のとおりこの身になりますように。」という完全な謙遜といえますか、信仰をもってこの救いの歴史における最も重要な役割を引き受けたという風に記されております。ところがマリアが、神のお告げをしっかりと受け止めたことによって、救い主である神の子がこの世界にお入りになる道が開かれたと信ずる人々の主な関心は、マリアが神の子を身ごもってキリストの母となった

という事実、マリアの身に起こった出来事だけに関心を示して、マリアが、救いの歴史における最も重要な役割を選択して引き受けた事実の背後にある、乙女マリアのたぐい稀なる謙遜、信仰には、それがこの場合一番大事なことなのに、あまり関心を向けなくなりました。そしてそのマリアの謙遜と信仰は、まさしく神の恵みによること、つまり、神がマリアに特に選んだ使者を遣わすという、マリアに与えた慈しみと憐れみ深い配慮、そのような神のケアのおかげで、はじめてマリアは「私は主のはしためである。」という言葉で自分に与えられた使命を引き受ける選択をしたということは、マリアへのお告げの大事さを信ずる人たちの間でもあまり注目されないようです。このような神の働き、神様の行為としてのケアについて語るのには、ケアリング・プラクティスというメインテーマにおいて行われる学術集会には、不協和音ではないかと批判されそうです。しかし「ケアの人間学」という書物、これは浜渦という、大阪大学教授がお書きになった本ですが、そのなかに「人間はケアシケアされる存在」として定義できると記されています。それほどケアという行為は人間性に深く根ざしているものであります。更に、ケアシケアされるという相互的あるいは互恵的なその関係は、決してギブアンドテイクといった合理的なレベルのものではなく、浜渦さんの言葉によれば、共通の何か大きな宇宙的な生命の営み、聖なるもの、あるいは人間の実存にかかわるそういう領域に属することと受け止めるべきだという訳です。しかし、私の感じではそのような回りくどい説明、解説をする必要はなく、もっと端的に、人間はすべて非常に大

きな、避けることの出来ない悲惨な状況と云いますか、避けることの出来ない苦しみを皆が抱えこんでいる、つまり、人間はすべて憐みを必要とする存在であるという、この現実直面するところからケアというものを考えた方がいいのではないかと考えます。つまり、この世界にはケアを与えるだけで、ケアされることを必要としない人間は存在しないのではないかと、この明白な現実からして「人間は本質的に、ケアシケアされる存在である」と言いきってもよいのではないかと私は率直に感じたわけです。

この観点に立って、ケアリングとプラクティスというテーマに私どもが立向かう時に、我々は人間と人間との間で実践される、ケアシケアされるという人間社会の根本的な秩序というものは究極的には我々すべての人間を慈しみと憐れみをもって見守る神のケアによって満たされたものである、そう考えるのはそう偏った突飛な考えではなく自然ではないかと私は考えるわけです。先頃の東日本大震災の悲惨な状況を目撃した人達の多くが思わず発した、口にしなくても心の中で叫ばれた「神様はどこにおられるのか」「一体神様はおられるのか」という嘆き叫びというのは、まさしく私たちの心の奥深いところに、このような神のケアにより頼む思いを秘めているということではないか。「神などどこにもいない」と口にする人でさえもどこかで、すべての人間を憐れみをもって見守っている神の存在を認めているのではないかと、「神様はどこにおられるのか」という心の叫びが出てくるのはその証ではないかと私は思うのです。それでこのような学術集会で神のケアを語ることも、そう間違いではないのではないかと考え

ました。ここまでを、今日の私の前置きとしたいと思います。

## II. ケアと愛

まず、「ケアと愛」についてお話ししたいのですが、これは私が最初にアメリカに何年間か留学した時に感じたことですが、care ケアということばと、love ラブということばの使い方の難しさ、というのが私の頭のどこかに刻みつけられています。私はケアという言葉を使い損ねて友達を怒らせたことがございます。余り気にしないでいいのでは、と言ったつもりが、突き放すように聞えたのです。やはり、I care, I don't care という言葉はとても注意して使わなくてはならないのではないかと思ったことです。ここで問題にされている、介護という意味のケアとは違いますが、私どもの自然な人間性に根ざした、こころの働きとしてのケアというものを私は語りたいと思うのです。まずケアというものがどういうものであるか、ということをはっきりさせるために、おそらく非常に似通っていると思われる二つの言葉、ケアと愛との関係について最初にみていきたいと思います。ケアすること、ケアリングというのは根本的に人間が社会の一員として、というよりも、もっと根本的に人格として、パーソン person としての行為であることを最初に強調したいと思います。我が国では individual 個人と person パーソンという二つのことばは、ほとんど同じ意味で使われているようです。代表的な例として日本国憲法では人格ということばは、あまり出てきません。「人格」と言った方が良いと思われる場合でも「個人」が使われています。しかし教育基本法

では個人ということばと、人格ということばが、ほとんど入れ替えることができる意味合いで使われております。そういうことで、人格の尊厳という表現はあまり使われなくて、個人の尊厳、個人を尊重する、と言われております。しかし私は尊厳ということばは、人格について本来的に使われるべきことばで、個人の尊厳ということばは、あまりふさわしくないと、考えております。つまり、人間の尊厳というのは人間社会を、あるいは人間共同体を構成している一員、一部分としての個人ではなく（その場合、人間は目に見える自然界の一部として考えられていて、しかも周りのすべての生き物と共生して生きるべきものとしての人間と考えられていると思うのですが）そういう意味で人間についての尊厳を語るのではなく、むしろ人間は物理的な自然界を構成する部分としてではなく、それを超越した精神的な存在としての尊厳、価値を理解され、また、尊重されるべきではないかと思えます。少し堅苦しい狭い考え方ではないかと思われるかもしれませんが、なぜ私はそのように考えるかと申しますと、その人格の特徴として誰もが考えるのは、人格は自由な存在である、自分で自分のことを決める自律的な存在であるからという意味で、人間は自由であるというのですが、しかしその場合精神的な存在としての人格には注意が向けられていない。ただ単に、他のすべての人間から区別される、この人間としての個人、個人というのは唯一である、たとえナンバーワンではなくてもオンリーワンであるということが強調されているようです。しかし私には、ただこの人だけ、一人だけということで人間の尊厳、人間が価値ある存在になると

はどうしても考えられない。ほんとうの意味での自由について考えますと、確かに自由な存在として人格を私は理解するのですが、ルソーが言うように人間は生まれながら自由であるというだけでは、本当の意味で人間が自由であるとはどういうことかは説明できないと思うのです。人間は自由で、平等な存在であるから何でも選ぶことができるとか、あれもこれも選ぶことができる、何ものにも縛られないという宙ぶらりんな状態を自由と呼べるのでしょうか。そうではなくて真の自由というのは、何か絶対的な価値に自分が結びついていて、それをひたむきに求めている、そういう自覚がある時には他のさまざまな二次的な価値については、私たちはどれにも固執する必要がない、それらもろもろの相対的な価値については無関心である、固執せずにすむ、それらから自由になるという意味で自由というものを考えるわけです。ほんとうの自由は絶対的な価値を前提として成立するものです。そのことからして相対的な二次的な価値については自由になる。価値を相対化して自由になるのではなく、絶対的な価値に結びついていくことがほんとうにつきつめて考えた自由といえる。そうしますと人間が絶対的な価値とどのようにして結びつくかといいますと、人間の知的な働き、知る、愛するという人間の知的な働きを通じて絶対的な価値と結びつけられるわけです。人間はそういうふうな精神的な営みをもつ存在としての人格である。そういう働きによってすべての自然的なものを超越するような価値に到達する。そういう人格について私たちは語るべきではないかと考えるわけです。

ところで人間の人格性が最も顕著に表れ出る

行為が愛することであると言えるとする、愛とケアとはどういう関係にあるのでしょうか。私は愛についての書物はそう沢山読んだ訳ではありませんが、一番印象深く読んだのは C. S. ルイスという、イギリス人でルネサンス英語、文学の専門家です、我が国では『ナルニア国物語』の著者として有名ですが、その C. S. ルイスが書きました『4つの愛』The Four Loves』という書物があります。それによると、愛には4つの種類があります。つまり愛情 affection、友情 friendships、恋愛 Eros、聖なる愛 charity。このように愛には4つの種類があるということです。ここで仮にケアを愛の一種と考えるとすると、実は4つの愛、愛情、友情、恋愛、聖なる愛のいずれにも Gift love (与える愛)、Need love (必要とするものを受け取れる愛)、appreciative love(何かを本当に大事であると認めてそれに惹かれる愛)、この3つの要素が含まれているとルイスは述べているのです。ここで仮にケアを愛の一種と考えるとしますとそれは appreciative love の要素が非常に強い affection と言えるのではないかと私は考えます。

ケアという行為はケアする相手を大切にすること、気遣うという愛でありますし、そして慈しみ深い愛としてのケアが、気遣う、あるいは大切にすることは何かというと、相手の弱さや相手の被っている様々な苦しみとか、欠陥とか惨めさではないのでしょうか。それを気遣う、それを大切にすることこれが一番大事です。それとともに、ケアは何よりも惨めさ、あるいは苦痛、苦しみを被っている人の惨めさ、苦しみというものを自ら共有する (communicate) 愛です。コミュニケーションという言葉がありますが、コミュ

ニケートとは普通は相手と言葉を交わすとか会話するということですが、もともとは共にする、特に大事なことを共有するということが本来的な意味であります。私たちが苦しみを共有するという態度で相手の苦しみに向かう時に、その苦しみ惨めさを共有すれば、その人格的な交わりによって、そのおかげで相手の悲惨さが何か美しいものになるのではないのでしょうか。美しいというのは奇麗というのではなく、私たちにとって一番尊い、そしてそれを大事にせずにはおられないと感じることを指して、美しいと言っているのですが、そういう相手の惨めさを共有するという、その言葉は憐み深さというものです。それは相手の悲惨さを共有する心という意味です。Misericordia というラテン語がありますが、このことばは、憐み深く相手の悲惨な状況を共有して、それを自分のものとして受け止めるところ、つまり憐み深さと言う意味です。普通、憐みといいますと、何か相手を見下しているような態度に思われがちですが、それは憐み深さということばについての誤解だと思います。すべての人間は根本的に悲惨さ、ミゼリー misery というものを抱えている、そして、それは人間はケアを必要とする存在であること、それを必要としない、ケアされることを必要としない人間は一人も存在しないということです。そういう観点から考えますと、相手の misery 悲惨さを共有するという、憐み深さということは決して相手を見下しているわけではなく、むしろ私達は誰もがケアされることを必要とする存在であるということを自覚したうえで、端的に申しますが「自分がケアしている相手から、ケアすることで何か最も尊いものを頂いている」

という、そういう謙遜さを学ぶべきではないかと私は考えます。憐み深さというのはそういう意味で、ケアの本質になるのではないかと思うのですが、それは慈しみ深い愛と言いかえることが出来るものであって、そのことからケアの本質であると言えるのではないかと思います。ここまで私は人格という言葉は何度も使っているのですが、次に人格というもののパーソン person についてどのように理解しているのかお話しをしたいと思います。

### III、人格の中核としての Communication (交わり)

人格は、ラテン語ではペルソナといいます。この言葉については色々と語源的な説明がなされておりますが、私たちに親しい説明として、哲学者和辻哲郎が「面とペルソナ」というエッセイで指摘するところによると、ペルソナは役者が自分の配役を観客に如実に示すためにかぶる面のことであります。このように語源的な説明から始まって、ペルソナという言葉は古代ローマ法にも出てくる法律用語でもありますが、さらにキリスト教神学の歴史では三位一体論とか、キリスト論の概念として神学的な用法があります。私自身は人格という概念に関心をもったのは若いときで、大学院を終えてから最初に公にした論文が「トマス・アクィナスにおける人格の統一性」でした。これは、ペルソナの「一」性 (unity) の概念について 1956 年に発表した論文ですが、それ以降も、ほそぼそと人格という問題には関心を持ち続けておりました。今から 8 年前、2009 年に「人格 (ペルソナ) の哲学」という書物を書いております。それでまとめましたかったのですが、すぐにまだ未熟で不十分

なことがわかりました。特にまだ不十分だったのはこういう事です。哲学の歴史では、人格の本質、人格を人格たらしめるのは、それが唯一独自の個別者であることだ、とされてきました。先ほど個人について触れましたが、つまり他の何者とも共有不可能な、何者ともコミュニケーション出来ない根源をもつ存在であることが人格である、と哲学では説明されてきました。しかし私はそうではないと考えます。人格は精神的な存在である限り、交わりにおいて存在する、交わりにおいて生きている、交わりにおいて行為するという存在である。そこまでは上の書物で書いたのですが、さらに進んで人格という存在、その中核にあるものが交わりである、と最近考えるようになりまして、そのことをまだ明らかにしなかったのが、2009年に発表した書物は不十分だと思ったわけです。そして今日、皆さまにお話しする内容、つまり人格の中核、核心としての交わりという立場はこの数年考えてきたことに基づいております。私は自信をもってというよりは、皆さんに是非ご批判を頂きたいと思って今日そのお話しをするわけでございます。このように私が人格というものの中核は、これ以上分割できない、これ以上分けられない点というようなものではなく、むしろ交わりである、そう考えるようになったきっかけが二つあります。一つは、キリスト教神学では神は「一」である。キリスト教やユダヤ教、イスラム教は一神教であると申しますね、唯一の神を信ずることが言われています。たしかに神は「一」である、しかしその「一」ということは、私たちがものを数える時の一(ひとつ)ではないのです。一神教は偏狭である、他の神を受け入れられな

いと批判する人がいますが、キリスト教の神は「一」であるというのは、決してそういうものではない。キリスト教では神は3つのペルソナ、父、子、霊であると申します。この3つのペルソナを区別するという点において、神は「一」である。そのことは神の本質を言い表わすもので、神が「一」であるということは神秘であります。私は神が「一」であるのは1, 2, 3と物を数えるような「一」ではないということは、前々から承知しておりましたが、神が「一」であることは3つのペルソナを区別することを意味するという事だ、そのように「一」ということを私が理解するようになったのは、ごく最近のことです。先ほど申しましたアウグスチヌスが書いた『三位一体論』とか、下って中世になると、十二世紀のシトー会修道院長クレルヴォーの聖ベルナルド—私は大学一年のときに洗礼を授けられたのですが、ほんの少し読んだだけですごく魅力を感じたこの聖者から洗礼名をいただきました—が『熟慮について』という書物の中で三位一体の神秘について非常に深い思索をされており、とくに神が最高に「一」であることは三位一体の神秘において示されていることを強調しています。そしてトマス・アクィナスは『神学大全』で神は「一」であり、最高に「一」であることを論じるさいに、ベルナルドの著作のこの箇所をより所にしています。しかし我が国ではキリスト教の神は三位一体であるという教え、神は3つのペルソナをもつという教えは、一神教ではなく、あれは多神教であると言っている神学者、宗教学者もいますが、それは間違いだと思います。

ペルソナという存在の根本には、交わりがあ

ると考えるようになったのは、最近、三位一体の神秘について改めて考えるようになったからです。神が三位一体であるということが、神は「一」であるということだと、わかったとは申しませんが、その意味を味わった、ということが、私が人格についての考えを、ある程度自分なりにまとめるのを可能にした背景でございます。もう一つ、人格というものの核心には交わりがあると考えついたきっかけは、最近になって自己認識とか自己愛という問題について以前よりも、よく考えるようになったことです。自己を知る、自己認識をするといえ、私達はよく自己紹介というものをやりますが、私は自己といってもそう簡単にわかるものではないと思いますので、自己紹介しろと言われてもそれは出来ないかと断わることになっています。むしろ他の人に稲垣はこういう人間だと言ってもらった方がはっきりすると思います。私は自己認識とか自己愛というものを考えているうちに、私が一人称単数代名詞の私ということばで呼んでいる私、自己とは、一体何だろうか、と説明できなくなりました。今ここで「私は」、と申している「私」を皆さんは見えていません。皆さんが見ておられるのは稲垣という三人称の人物です。私が「私」と言うとき、私は「私」のことを思っている、その意味で「思う私」は存在する。だが「思う私」は私には見えても、他の人には見えません。私はたしかに「私」を、つまり自己を見る（知的な意味での「見る」ですが）ことができます。しかし、私を私が知るという時に「知る私」と「知られる私」の二重性があるわけですが、そこには二人の私がいるのではない。私は一人であり、二重人格ではない。ではそれほど

うということか考えると、非常に難しいわけです。知る私と知られる私、愛する私と愛される私、あるいは皆さんもそういうことはよくおっしゃることですが、自己に打ち勝つということ、あるいは今日も決心したのだが、負けて煙草を吸ってしまった。という風に自分に負ける場合、どちらがほんとの自己ですか？、負ける自己ですか？、勝つ自己ですか？、そういう質問はばかっていますね。自己が「一」であることは皆さんよくご存じである、私たちはごく当たり前のこととして、知る自己と知られる自己、愛する自己と愛される自己、勝つ私とそれを勝たせる私がいるという風に語る。しかしここには二つの私がいるのではないかと戸惑うことはない。例えば、学校で学んだと思いますがソクラテスの言葉として有名な「汝自身を知れ」ということば、それは実は知恵の神、アポロのデルフォイの神殿に刻まれています。あるいは福音書の「隣人を己のごとく愛せよ」、という言葉もよくご存知ですね。しかし「汝自身を知れ、己を愛せよ」と聞くと、確かに汝自身とは何かを知ることとはとても難しいと感ずる。また、己を愛するように隣人を愛するという事は難しいと感じるでしょう。しかし自己を愛するという事については、それはどういう意味か、ということにそれほど思い悩むことはない。つまり私たちは自己について二重性を意識しながら、それが「一」であるということには何も疑いを感じていない。知る私と、知られる私を知るというふうに、二重性がありますが、それが「一」であるということについては何も疑問を感じていない。このように「一」であることを決して疑っていないというふうに、この私の二重性というのは私たち

にとって親しいことではありますが、それがどう  
いうことかと改めて考えると非常に難しいこと  
で、もう神秘としか言いようがないことなので  
すね。

少し脱線しますが、私達は日常の生活の中で、  
とてもあたり前で誰もが知っていることでも、  
よくよく考えると、とてもわからない神秘的だ  
ということがいっぱいあります。しかしだんだ  
ん年を取るにつれて考えてもしょうがないから  
忘れてしまうか無視してしまう。しかし、それ  
を忘れないで問題にするのが哲学者なのです。  
哲学する者は、誰もが承知しているようなこと  
を、それは何かと考えるのですが、それが何で  
あるのか理解しようとする果てしなく難しく、  
それはなぜなのかと考えると神秘としか言いよ  
うがないものがあります。そのような  
ものの一つに、自己というものの二重性があり  
ます。それは単なる二重性ではなく、交わりと  
して理解すべきではないかと私は考えます。  
そうすることによって私達は人格というものを  
よく理解できるのではないかと考えているわ  
けであります。

つまり、私たちが自身の自己というものは常  
に二重性がありますが、そこに交わりが含まれ  
ている。私たちはこの二重性はあたり前であり、  
神秘的であると申しましたが、それは実は優れ  
た在り方、優れた存在の仕方だと思います。な  
ぜかと申しますと、何か「今ここに」という  
あり方を皆さんは最も確実で、すべてがその  
ような仕方であると考えている。しかし、よく  
よく考えてみますと、「今ここにある」というの  
は限られている。それは限定され特殊化された  
あり方ですよね。しかし、私が私であるという

自己の二重性、そのあり方というのは、ほんと  
に「自己においてある」存在している自己が確  
立される訳ですね。それは優れた存在の仕方  
である、と言っていいと思います。

人間がその本質からして、社会的であり、共  
同体を形つって生きているのは、人格の核心  
である交わりのおかげであると思うのです。こ  
の交わりがパーソンとしての存在の中核とし  
てありながら、すべてのものに対して開かれて  
いる交わりなのです。私自身として私の中心に  
ありながら、すべてのものに開かれ、この交わり  
はどこまでも広げていけるような交わりである。  
それによって私達の社会は、成り立っている。

「人は人にとってオオカミである」、だから我々  
は国家を作って個人の権利を守っているのだと  
政治学者のホブズは申していますが、しかし  
「人は人にとってオオカミである」、という言葉  
は、紀元前のローマの喜劇詩人が言った言葉で、  
あまりそう真面目にとらなくていい言葉です。  
もっと大事なことは「人は人にとって友である」、  
人は本性的に、もう一人の人にとっては友であ  
る、と哲学者アリストテレスは『政治学』の書物  
で言っていますが、こちらが人間の真実を言い  
表していると思います。

ケアというものは、この人間の社会的本質、  
人格の根源である交わりに基づいているもので  
あり、この交わりをすべての人に広げていくの  
がケアのプラクティスであり、ケアというもの  
が全ての人に広がって世界を作り出しているの  
ではないかと思っています。

#### 4. おわりに 「旅する者・人間」

最後に、人間は本質的にケアしケアされる存



在である、その人間とは何であるかを考えることによってこれまで考えてきた人格に特有の行為、あるいは働きとしてのケアの概念を、はっきりさせたいと思います。

人間のこの地上における生活、生は根本的に旅である。そういう意味で人間は旅するものであり旅の途上にあるものと理解しております。人間は旅するものですから、生涯を通じてケアを必要としている。旅は道連れともいいますが、ケアを必要とするのは人間が本質的に旅する者であるからである。さまざまな困難や、さまざまな危機を切り抜けて確実に目的地へと向かわなければならぬことからケアを必要とし、また旅することを学ぶために私たちはケアする能力を身につけようとしている。

この学会が掲げる理念は「ケアリングと平和」と承っておりますが、人間は本質的に旅するものであり、そして旅するものにとってケアリング無しには平和はありえないと思います。そういうふうに考えますと、この学会が掲げております理念は尊いものであります。私達はすべての旅が安全で快適であることを願い、その為にいろいろ計画し配慮します。これは、ごく自然な願いであって、さまざまな配慮、道連れに対する、こころ遣いなど、それは美しいものであり称賛すべきものです。しかし、ケアはそのような側面、そのようなレベルに留まってはならないと思います。というのも私たちが旅する者であるという人間の旅は、気晴らしやレクリエーションではなく本当の旅であります。最も重要なことは、それが安全で快適な旅であるということばかりでなく、目的地に到達することが旅の最も肝腎な点です。そして私たちが目指して

いる目的はたしかに平和であります。私たちが辿っている旅路の安全で快適な一時の憩いの平和ではなく、目指す目的地、人間としての旅の究極目的である真の意味での幸福に到達したときに得られるやすらぎ、その憩い、永遠の休息とも言える平和であります。この永遠の休息というものは、決して眠りではありません。人間の最後の幸福は、確かにやすらぎであり憩いです。しかしそれは眠りではないと思う。われわれは死者を弔うときに、どうぞ安らかに眠ってください、というのですが、私はその言葉には腹が立つのです。やすらかな眠りはたしかによいものですが人間の最後の幸福、やすらぎはもっと豊かな旅の収穫としての平和であります。

ケアリングと平和の理念はとても尊いものです。「ケアリングと平和」を理念として掲げているこの学会であえて人格とは何かという抽象的な観点からケアを取り上げたのですが、ケアを必要とする人間がケアされるだけではなく、つまりケアする者がケアするだけではなく、ケアすることで、自分もケアされ尊いものを自分も受け取るという態度を学ばなければいけないと思ったのです。私たち自身がケアしケアされることで 私たちはいわば人間性を耕すのです。カルチャー（文化・教養）とは人間性を耕すということだと思えます。こうして私たちは人格を形成し、そのことによって人間とは何かという理解を深めていけるのではないかと考えました。あえてこの学会で人格というテーマを取り上げた次第です。

これで私の拙い舌足らずの講演を終わらせていただきます。